

# 陸の水

==== No.72 ====

日本陸水学会東海支部会  
 ニュースレター（2016年4月19日）  
 発行：日本陸水学会東海支部会  
 連絡先：〒432-8561 静岡県浜松市  
 中区城北 3-5-1 静岡大学 工学部  
 戸田 三津夫  
 Tel:053-478-1146、Fax:053-478-1183  
 E-mail: [tmtoda@ipc.shizuoka.ac.jp](mailto:tmtoda@ipc.shizuoka.ac.jp)

## 目次

- 2015年度「第18回研究発表会」の報告 (p.1~4)
- 第28回談話会の報告 (p.4~8)
- 2016年度研究助成の案内 (p.9)
- 2015年度「第19回総会」の報告 (p.1~4)
- お知らせ 会費納入のお願い (p.14~15)
- 東海支部会のHPがリニューアルしました！ (p.15)
- 幹事退任のあいさつ、新幹事就任のあいさつ (p.16)
- 編集後記 (p.16)

## 2015年度「第18回研究発表会」の報告

第18回 日本陸水学会東海支部会 研究発表会 (@王滝村) に参加して

国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター 小野田 幸生  
 (写真とその説明：戸田三津夫)

2016年2月27日、28日の2日間にわたって、長野県王滝村にある王滝村公民館および滝旅館において、標記研究発表会が開催された。御嶽山の噴火が水環境に及ぼす影響に関する社会貢献事業の中間発表の場も兼ねて、地元王滝村での開催となったようだ。参加者は31名で、そのうち17名による研究発表があった。例年よりやや少なめの発表件数だった。

例年のように研究内容は多岐にわたった。御嶽山の周辺河川での研究の他にも、土壌と雨水の浸透度との関連性、淡水クラゲの熱烈的な観察結果、環境教育の客観的な評価の試み、地質と高山植物の関連性、水質や物理環境と底生動物群集との関連性、土砂管理やその生物への影響の検討、干潟の浄化能力の定量的評価、深見池の化学的な解析と長期変動、ヤマトシジミの流程分布調査と生息環境との関連性などの研究成果が発表された。

学生さんによる研究は、地道な調査、実験、観察に基づくものが多く、グラフ等が多いのが特徴的であった。研究に対する思いも強い印象を受けた。そのためか、他の人をも説

得させるような研究目的の明示については改善の余地があり，質疑応答でも指摘されていた．また調査結果が多いために，それを基に何を伝えたいのかという総括があればもっと良かったのではないかという発表も散見された．質疑応答も教育的観点から，発表者思いのものが多く感じられた．



研究発表会（体育館仕様の講堂、白熱する議論、窓の外は雪が舞う）

一般の方の研究は，御嶽山周辺の河川の研究も含めて話題提供，提案，相談といったタイプが多かったように思う．御嶽山周辺の河川の研究では，先述の通り中間発表的な報告という色合いが強く，それぞれの担当項目の知見を統合する良い機会となった．また，噴火という大規模攪乱の影響を断定的に言えない状況に対し会場からの質疑応答を通じて叱咤激励も頂き，よい刺激となった．また，地元の方にも聴講頂き，有益な情報を頂くこともできた．その他の研究でも，調査，実験等のデータ報告や思考実験の構想などが披露され，質疑を通じて考察を深めたいという雰囲気が見られた．本会のように大規模ではない研究発表会では，このような相談型の発表ができるというのは大変良いことだと思った．今後も気軽な雰囲気のもと，切磋琢磨できる場であってほしいと願いたい．

研究発表会のお楽しみの一つが，晩御飯．鮭の刺身，葛切り入りの鍋，アユの塩焼きなど，山の幸をふんだんに盛り込んだ料理が並び，その品数の多さに驚かされた．ご飯も用意されていたが，おかずだけでお腹いっぱいになるという贅沢ぶりだった．美味しい食事に，参加者同士の会話も弾み，楽しい時間となった．その後は，そのまま懇親会へ．多くの酒が並び，地元木曽の美味しい日本酒やワインをはじめ，参加者の地元からの日本酒の差し入れもあり，「名水」を堪能する時間だった．和やかな雰囲気の中，夜遅くまで（他の宿泊者に迷惑がかかるくらい）盛り上がった．



恒例！夕食あとの懇親会会場

翌日の研究発表会（内容については先述の通り）とその後の総会を経て，会場近くにある王滝食堂にて，地元料理などの昼食を楽しんだ。

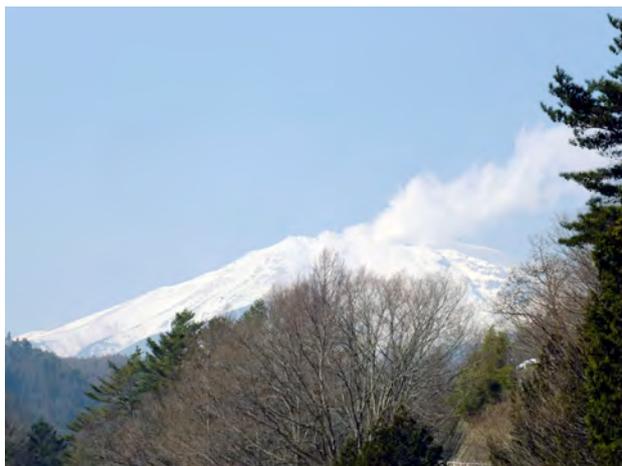
その後は，恒例の観察会だった．御嶽山周辺の河川の研究の地元であることを利用して，土砂崩れによって形成された自然湖，それに注ぐ下黒沢，異質な水質をもつ濁川，その流入後の王滝川など多くの地点の特徴などが紹介された．自然湖は結氷し，ワカサギ釣りの方を見ることができたし，参加者が氷の上を歩いて盛り上がった（私は自重を考え自重した）．帰り際に，牧尾ダムを眺めながら，木曾福島に到着し解散となった．



結氷した自然湖（融けかけていたが、厚さ 10 センチくらいのところも）



濁川の流末付近（酸性の水、生物の気配なし、赤い石が印象的）



噴煙を上げる御嶽山を遠くに望む 濁川合流点下流（幾分希釈された酸性水）

このように、今回の研究会も大変楽しませて頂いた。限られた参加費の中で、楽しさを最大化するという相反する課題が見事に達成された研究発表会だった。それも、陸水学会東海支部会の幹事会の皆さんの、企画・調整・準備の賜物だと思う。当日も、会場設営やお菓子の準備など、きめ細やかな配慮を頂いた。裏方の努力の全ては把握できていないと思うが、運営にかかわって頂いた皆様に感謝するとともに、お礼申し上げたい。

## 第 28 回 東海陸水談話会の報告

日時 平成27年11月6日（金） 17時30分~19時30分 名古屋大学 減災館

話題提供

「中央ヨーロッパの河川再生」： 山本 敏哉（矢作川研究所）

「数値河川生態系の構築に向けた取り組み」： 溝口裕太（名古屋大学大学院）



## 「中央ヨーロッパの河川再生」

山本 敏哉（矢作川研究所）

### はじめに

2014年の6月から12月の半年間、オーストリアの首都ウィーンを拠点に、中央ヨーロッパで先進的に行われている河川再生を勉強してきました。これまで2週間ほど海外で過ごしたことは何回かありましたが、このような長期の滞在は40歳半ばにして初めての経験で私にとっては大変に新鮮な刺激にあふれた半年間となりました。2003年にジャーナリストの保屋野初子さんが出版された「川とヨーロッパ」（築地書館）を読み、ヨーロッパ各地で始まっている河道の拡幅や護岸の撤去などの大規模な再生事業に強い興味を抱いていましたが、私自身も淡水魚類の生態研究をする中で、多くの淡水魚とくに、浅い一時的な水域を利用するグループや川と海とを回遊する魚類の中に数を大きく減らしている種が多いことに問題意識を持っていました。やや大げさな言い方をすれば、こうした「魚類群集の崩壊」ともいえる事態を抜本的に改善するためには、ヨーロッパ流の「大きな自然再生」に学ぶことが多いのではと考えるに至りました。滞在中はウィーン自然資源・生命科学大学と環境コンサルタント方々にアドバイスをいただきつつ情報収集を行いました。以下、私自身が現地で大きな学びと気づきになったことを記します。

### 1 氾濫原の自然再生、希少種の野生復帰では日本よりも遙かに先を行っている

河川環境に対する住民意識の高さからか、ヨーロッパの自然再生は想像していた以上に進んでいました。2000年台後半のEUの経済危機は日本のそれ以上に深刻で、大学などの教育部門などへは厳しいしわ寄せが行っていましたが、自然再生に関する事業で経済危機が原因で縮小したのは一部にとどまったとのこと。日本では、河川の自然再生に関する予算は治水目的の予算の一部が活用できるにすぎませんが、こちらは再生事業を実施することがEU（欧州連合）の「水枠組み指令」という指令によって義務付けられています。また、再生事業を進めるには莫大な予算が必要ですが、必要な予算をEUが50～75%補助するLIFEという財団が設立されていました。この2つが両輪となり、現在まで欧州各地で自然再生が精力的に進められていることが理解できました。農地を河川に戻すプロジェクトも、数十ヘクタール程度の規模の事業はヨーロッパ各地で進められていました。

希少な野生動物を復帰させる事業も多くの種で1980年代から始まり、例えばほ乳類のビーバーはかつてウィーン市近郊では姿を消した動物でしたが、再導入によっていまは所々でその姿をみることができるようまで回復しています。日本では既に絶滅したといわれるカワウソもウィーン近郊にこそ棲息していませんでしたが、個体数が回復傾向にあり、魚を好んで食べることから一部では漁業者との間で軋轢を生じているほどでした。

川の近くの平地で、洪水の危険のある場所では、農地を氾濫原に戻す事業の一貫で、住民の移転も一部始まっていました。まだその件数はオーストリア国内で2桁台にすぎないとのことですが、近年の洪水頻度の高まり（2013年にもウィーン近郊で洪水があったそうです）と政府の後押しを受け、今後も増加することが見込まれています。

### 2 環境や生物に素養のある人材が、社会インフラの維持に関わる分野で雇用されていた

オーストリアでは、河川工事で自然環境を有する場を整備することになった場合、計画段階から土木工学に素養のある技術者に加え、環境に詳しい人そして景観に詳しい人がタッグを組んで事業を進めることがスタンダードとなっています。また、ダム の 管理 所 を 含 め た 河 川 の 管 理 に 関 わ る 部 署 に お い て 、 環 境 学 と き に は 生 物 学 ( 生 態 学 ) に 素 養 の あ る 人 材 が 雇 用 さ れ 、 環 境 に 対 し て 配 慮 が 十 分 に 施 さ れ て い る か チェックする体制が年々充実していると伺いました。例えば、オーストリア最大の電力会社では数百人の従業員のうち、数人が環境関係の学部を卒業した人材で構成され、発電ダムの環境対策にあたっているそうです。日本では地方公共団体の建設部門、電力会社とも研究職など一部の特殊な業務を除き、こうした人材が雇用されているという事例はほとんどききません。

地方自治体では、土木部門に所属する人材の大部分は土木工学関係の学部や大学院を経た上で入所し、採用時の専門試験でもほぼ土木工学の知識を問う構成となっています。土木というイメージからは、土木工学の知識をふまえた上で、道路、河川、公園等のインフラをつくり、維持にあたることを連想しますが、実は整備の対象には程度の差こそあれ「自然環境も関わる層状構造を有した総体」を管理する業務を負っているといえます。美しい景観のまち並みや公園を日本の文化に応じた形でさらに整備し、河川や池などの水辺とそこに棲む生き物との折り合いをつける上でも、インフラ整備を支える人材確保と育成の仕方について、改善すべき点が多くあるように思いました。

### 3 力を持った NGO が自然再生で活躍

欧米には NGO (非政府組織) が自然保護でも活躍していることを、メディアを通じてきいていましたが、実際にヨーロッパの河川の自然再生に携わる NGO の方の発表をきいたり、インタビューをする中で、彼らが専門的な知識を持ち、民間企業の社員並みに給料をもらうプロフェッショナルな存在として貢献していることに強い感銘を受けました。特に存在感の大きかったのがスイス生まれの世界自然保護基金 (WWF) です。WWF といえばパンダのマークに象徴されるように、絶滅に瀕する海外のほ乳類の保護活動をしているイメージが我々には強いですが、欧州では各国の WWF がローカルな河川再生のプロジェクトに深く関わっていました。2014 年 10 月にウィーンで開催されたヨーロッパ河川再生会議でも、イギリス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、ルーマニアの WWF の方の発表が様々なテーマでありました。



WWF ハンガリーによるドナウ川の中州再生の発表

---

彼らの活動を支える充実した資金が、個人や企業から寄付の形で出されています。こうした企業のような NGO 組織による日本の自然保護の事例は少なく、日本の自然保護は官公庁と学術機関、住民団体が参画する形態が大部分です。言ってみれば日本では一つ大きなプレーヤーが欠けた編成で問題解決にあたっているのに気がつきました。寄付金の文化が日本に乏しいこととも無縁ではないだろうし、この NGO の弱さに日本政府も気づいているから、NPO を推進する政策が重視されてきたのかとも改めて考えるに至りました。

#### 4 海外で実感した日本の強み

ヨーロッパに滞在することで気がついた日本の強みもいくつかありました。まず、ボランティアをベースとした市民との共働活動は、私が見聞した河川の環境保全に関する限り、ヨーロッパでは盛んではないように感じました。河原のゴミ拾いや草刈りにしても、基本的に官公庁の業務として進めているようでした。「日本は労働と非労働との境界が曖昧だ」と耳にしたことがあります。こちらは明確に区分けする文化が色濃いように感じました。労働時間が厳格に守られている（定時になったら皆すぐに帰宅する）こととも関係しているかもしれません。逆にいえば、国内での住民のボランティアや NPO 活動の興隆は、大変にユニークな活動ともいえ、このパワーで地域の課題の解決ができれば、国際的にも発信できる材料となるかもしれません。

次に、矢作川漁協のような、管理者や電力会社に対し科学的な知見や法律を盾に交渉を行う漁協は、欧州では見聞しませんでした。同漁協のこれまでの運動のおかげもあって、矢作川ではアユが遡上できる魚道が整備されていますが、この回遊魚の保護の面ではオーストリアと優劣付けがたいレベルにあったと思います。ドナウ川では、かつては黒海からウナギやチョウザメ類が遡上したそうですが、本流に造られたダムが原因でオーストリアでは壊滅に近い状態になっていました。矢作川漁協が一種の NGO として環境保護の面で貢献してくれていたおかげではないかと思います。

最後に、技術立国の日本の衰退がささやかれる昨今ですか、半年弱の間に 8 カ国を訪問する中で、日本の持つ技術と製品が他国に例をみないレベルで活躍していることを目の当たりにし、頼もしく感じました。師事したドイツ人の環境コンサルタントの方はプリウスを自家用車として所持されていましたし、フィールド調査では、ヨーロッパやネパールでもトヨタのランドクルーザーが最も信頼できる車として活躍していました。河川調査のポートには、ホンダの船外機が付けられ、調査で用いた発電機も同社のものでした。自然再生の河川工事の現場にはコマツの重機があり、ホームステイしたウィーンの家ではマキタの電動ドライバーが日曜大工で使われていました。日本の科学技術は、世界の人々にまだまだ信頼されています。

まだまだ強い日本のものづくり産業に恥じないような「いい川づくり」が実現できるよう、私もさらに頑張っていきたいと思います。

### 「数値河川生態系の構築に向けた取り組み」

溝口裕太（名古屋大学 大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 博士後期課程）  
（日本学術振興会 特別研究員）

2015年11月6日（金）に、名古屋大学減災連携研究センターにて第28回東海陸水談話会が開催されました。

この談話会にて発表の機会を頂きましたので、私がこれまで研究テーマとして取り組んでいる「数値河川生態系モデル」について地形、水質、藻類、底生無脊椎動物、魚類等の分野でご活躍されている研究者のみなさまからのご意見を頂きたく、研究内容についてご紹介させていただきました。

構築を進めている河川生態系モデルは、水系レベルでの物理基盤、生物相、物質循環の各プロセスや、これらの相互作用系をマクロな視点で捉えることが、河川生態系の姿を俯瞰する上で重要であることに加えて、現地モニタリングに基づく精緻な研究成果の積み重ね及び、集積された知見に対して、これを補完する有用なツールとなることを目指して開発を進めています。

これまでのところ、水系レベルでの解析が可能な流れ・地形解析モデル、水温を解析する熱収支モデル、藻類・底生無脊椎動物・魚類を含む生物モデル及び粒状有機物・無機栄養塩の動態に基づく物質循環モデルの開発が概ね完了しています。特に本モデルでは、河川生態系を特徴付ける大きなファクターである比較的高頻度な出水に伴う物理基盤の変化が、これを生息場として利用する底生無脊椎動物の動態に及ぼす影響について現地モニタリングデータとの検証作業や、生物動態に対する物質循環の応答特性についての把握を進めています。

今回の談話会では、本河川生態系モデルで考慮している生物相や物質循環のフレームや、開発段階のモデルの特定の河川景観への適用例と、その検証作業をご紹介するにとどまり、これを水系レベルに話題を拡張することが出来ませんでした。今後はさらに研究を進め、本モデルの有用性を認識していただけるよう、モデル開発における論点の整理や、モデル精度の向上、感度分析を含めた実河川へのモデルの適用と検証など精力的に進めたいと思います。

## 2016年度 日本陸水学会東海支部会 研究助成募集のお知らせ

今年度も研究助成の募集を行います。会員のみならずも様々なネットワークを通じて多くの方にこの情報を伝えていただくようお願いいたします。





日本陸水学会 東海支部

**アマチュア・若手研究者への調査・研究の奨励**

## 2016年度 日本陸水学会 東海支部会 研究助成募集

**趣旨**  
日本陸水学会東海支部会では、陸水環境(川、溜池、内湾(干潟)、地下水など)を対象としたアマチュア・若手研究者の調査・研究を奨励するために、以下のように研究助成を行います。

**助成対象となる調査・研究の分野**  
陸水環境を対象とした、自然科学・人文社会科学・環境教育の実践および教材研究 など

**募集対象者**  
アマチュア・若手研究者  
および研究グループ など

**【注意】**

- ・研究機関に所属していない個人・グループ(小学校、中学校、高等学校の関係者など)を優先的に助成する方針です。
- ・研究機関に所属する研究者、学生も応募できます。
- ・大学(院)生の方は、卒業論文研究、修士・博士論文研究の一部内容について 申請しても構いません。
- ・営利を目的とする研究には助成いたしません。
- ・当支部会員でなくても応募できます。

**助成金額**  
予算総額15万円以内で5件以内の助成を行います。  
・10万円分の予算まで申請可能ですが、申請内容に応じて減額して支給する場合があります。

**被助成者の義務**  
研究終了後1年以内に当支部会研究会での発表あるいは、ニュースレター紙上での成果公表して頂きます。

**応募方法**

①以下の項目を含んだ申請書類(A4用紙、様式自由、手書き可)を作成してください。

- 1) 研究題目
- 2) 助成を受けようとする個人の氏名またはグループ名
- 3) 助成を受けて実施しようとする調査・研究課題の内容(1000-1200字程度)
- 4) 助成金の執行予算案(項目ごとに千円単位で)  
例: 用品費(消耗品含む)、調査旅費(成果発表のための学会・研究会参加旅費を含めて良い)、謝金(アルバイト代)など。 ※謝金については妥当性のないものは認められません。
- 5) 申請代表者の連絡先(電子メールがあればアドレス明記のこと)

②下記まで郵送または電子メールでお申込みください。

**応募締切**  
2016年5月9日(月)消印有効

**■ 応募・お問い合わせ先**

日本陸水学会 東海支部(研究助成担当)  
〒432-8561 静岡県浜松市中区城北3-5-1  
静岡大学大学院 総合科学技術研究科  
戸田 三津夫(宛)  
E-mail: tmtoda@ipc.shizuoka.ac.jp

## 2015年度「第19回総会」の報告

## 2015年度事業実施報告

第19回となる総会が、2月28日の研究発表会2日目の終了後に開催されました。担当者から事業・会計等について説明があり、審議・承認されました。

## ・事業実施報告

昨年度の第18回総会において承認された事業内容（「当初計画」）と今年度の事業実施状況を次の表にて報告いたします。

活動項目	当初計画	実施状況
ニュースレター発行	年間4号	7月（No.69）、2016年2月（No.71）に発行。2016年3月にNo.72を発行予定。 電子版でも配信。No.70は論文集
論文集発行	年間1号	陸の水論文集2015（陸の水No.70）を9月に発行
サマースクール	夏1回実施	2015年8月29日、8月30日に足助川周辺（あすけ里山YH、平瀬ヤナ）で実施。 ※陸の水No.71に報告記事掲載
談話会	年2回実施	■第27回談話会 4/21（日） 18:30～20:00 「2014年9月27日御嶽山噴火が水環境に及ぼす影響」 谷口智雅、田代 喬、野崎健太郎、小野田幸生 ※陸の水No.69に報告記事掲載 ■第28回談話会 11/6（金） 17:00～19:30 「中央ヨーロッパの河川再生について」 山本 敏哉（矢作川研究所） 「数値河川生態系の構築に向けた取り組み」 溝口裕太（名古屋大学大学院） ※陸の水No.72（本号）に報告記事掲載
見学会	年1回実施	■御嶽山周辺の河川の第1回見学会（11/30） 第2回（2/28）を総会終了後に実施
助成金	15万以内で5件まで助成	1件（総額49,000円）の助成。申請総数5件（総額：311,533円）に対し、8名の審査委員の審査をもとに決定。助成団体名：加藤学園高等学校 化学部 課題：都市河川における硝酸イオン態窒素の紫外吸収法による分析について
広報・学会公式HP		<a href="http://island.geocities.jp/limno_tokai/index.html">http://island.geocities.jp/limno_tokai/index.html</a> に開設。活動状況・予定など随時更新中。 ML（仮）・Facebook（仮）の立ち上げ
総会・研究発表会	2月に実施	2016年2月27,28日に実施（長野県王滝村）。
教科書販売：	『身近な水の環境科学-測定実習編』	1冊定価2,700円（税別）を2,500円で11冊販売。

---

## 2016 年度事業計画（案）

1. 論文集（No.74）の発行
2. ニュースレター「陸の水」の発行：年間3号  
7月（No.73）、1月（No.75）、3月（No.76）
3. サマースクールの開催（8月）
4. 談話会の開催：年間2回（時期未定）
5. 見学会の開催：年間1回（時期未定）
6. 総会・研究発表会の開催・例年2月開催
7. 一般研究助成（15万円以内で5件以内を助成）
8. 学生奨励賞の創設（学生発表賞）
8. 活動報告（HPの更新、ML・Facebook、研究発表会の要旨の公開）
9. 「陸の水」論文集・教科書販売：最新論文集は2000円、教科書『身近な水の環境科学-測定実習編』は1冊定価2,700円（税別）を2,500円
10. 社会貢献（2015年からの継続として環境影響調査を実施）
11. 幹事会の開催

### ・次年度役員体制

2016 年は、2 名の幹事が新たに就任します（\*：新役員）。

- 会長： 谷口智雅（三重大学） 再任  
幹事： 田代喬（名古屋大学）研究（社会貢献）担当（留任）  
幹事： 戸田三津夫（静岡大学）陸の水NL 担当（留任）  
幹事： 宮川幸雄（土木研究所自然共生研究センター）庶務 担当（留任）  
幹事： 新実智嗣（株式会社水地盤研究所）事業 担当（再任：1年のみ）  
幹事： 吉成 暁（いであ株式会社 環境創造研究所）広報HP担当（新任）  
幹事： 大八木麻希（四日市大学） 会計担当（新任）  
中村早耶香（中部大学）会計監査（新任）

- （退任）： 白金晶子（豊田市矢作川研究所：広報）  
中村早耶香（名古屋女子大学：会計）  
内田朝子（豊田市矢作川研究所：会計監査）

### 予算決算書

2015 年度の収支の状況を以下の通り、ご報告いたします。

#### [収入]

費目	予算	決算	備考
前年度繰り越し金	638,122	638,122	
会費収入	184,000 64,000	105,000 4,000	一般 37、家族 2(次年度前納者含む) 学生 2、一般 1
雑収入	150,000	203,409	論文集別刷代 106,909 円、教科書 40 冊 96,500 円
寄付金	0	0	
利息	10	101	
総計	1,036,132	950,632	

#### [支出]

費目	予算	決算	備考
郵送料	15,000	1,130	庶務・会計に係る通信費
ニュースレター発行費	35,000	2,078	陸の水の送料、封筒・切手代など
要旨印刷費	15,000	10,000	第 18 回研究発表会要旨集製本謝金
事業費	500,000	107,708	総会等補助(見学補助、大会文具類、研究助成 49,000 円)
論文集発行費	400,000	324,740	論文集印刷代、送料
雑費	10,000	432	振込み手数料など
その他	0	10,030	幹事交通費等
総計	975,000	456,118	次年度繰越金 494,514 円

・2016年度予算については以下の通りです。

[収入]

費目	予算	備考
前年度繰り越し金	494,514	
当年度会費収入	171,000	会員 87 (特別会員 1, 一般会員 85, 団体 1) ※一般会員の中に, 学生会員および家族会員を含む
過年度分会費収入	75,000	前年度の会費徴収
雑収入	150,000	論文集・教科書販売(50,000円)、別刷り代(100,000円)
寄付金	0	
利息	10	
総計	890,524	

[支出]

費目	予算	備考
郵送料	15,000	庶務・会計に係る通信費
ニュースレター発行費	35,000	陸の水の送料、封筒・切手代など
要旨印刷費	15,000	第 19 回研究発表会要旨集印刷代
事業費	400,000	総会等補助、研究助成、談話会等の講師謝礼、社会貢献、HP
論文集発行費	400,000	論文集印刷代、送料
雑費	10,000	振込み手数料など
予備費	15,524	幹事会交通費等
総計	890,524	

## お知らせ 会費納入について

会費の納入が確認できた会員にのみ、論文集を送付することが総会で承認されています。論文集の発行が毎年7月頃に予定されておりますので、研究発表会・総会（2月）にて直接納入をされなかった会員の方は、その時期までに会費納入をお願いします。忘れてしまうことも考えられますので、早期をお願いします。

論文集発行後のニュースレターで、「論文集が届かなかった会員の方は会費が未納である」ことを伝え、再度会費の納入をお願いさせていただきます。論文集の発送までに会費納入が間に合わなかった方は、その旨事務局

([taniguchi@human.mie-u.ac.jp](mailto:taniguchi@human.mie-u.ac.jp)、担当：谷口)までご連絡ください。論文集は、会費の納入確認後に送付されます。皆さまからの会費は支部会の運営を支えるものですので、お忘れなく納入いただきますようお願いいたします。

2月	総会	会場で直接納入が可能
3月	ニュースレター (総会終了後)	会費の納入依頼 ↓ 論文集発行までに 納入ください
7月頃	論文集発行	<b>納入者のみに送付</b>
	ニュースレター (論文集発行後)	論文集が届かなかった方は未納である旨を伝え、再度の納入依頼 (納入確認後に論文集を送付)

---

## 会費の納入方法について

納入方法として、下記「ゆうちょ銀行」への振込、もしくは談話会や研究発表会などでの直接的なお支払いも受け付けております。ゆうちょ口座から通帳かカードでATM振込をご利用いただくと手数料無料となります(ATM送金料金が無料となるサービス期間は現在も継続中)。会費納入状況が不明な場合は事務局までご照会ください。2年度分の会費が未納の方は、規約に従い、翌年度には自動的に退会となりますのでご承知おきください。その際も、未納会費2年分のお支払いをお願いしております。

---

年会費：一般 2,000 円、学生（大学生以上）1,000 円、高校生以下は無料、  
団体 4,000 円、家族 3,000 円

**振込先が変わりましたので、ご注意ください！**

< ゆうちょ銀行からお振込みの場合 >

記号：12120-2 番号：73385891

名前：日本陸水学会東海支部会

< 他の金融機関からお振込みの場合 >

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：二一八（読み ニイチハチ） 店番：218

預金種目：普通預金 口座番号：7338589

カナ氏名（受取人名）：ニホンリクスイガツカイトウカイシブカイ

\*\*\*\*\*

**入会および退会の手続きについて**

総会で、入退会の手続きを以下のようにルール化することが確認されました。

■ 入会手続き

① 当会の HP にある入会申込書に必要事項を記入

② 申込先は会長宛て※とする（その後、担当幹事へ情報を共有）

■ 退会手続き

① 退会する旨、会長宛て※に連絡（その後、担当幹事へ情報を共有）

3 月は学生の方が卒業されるので、教員の方は特にご配慮お願いします。

※2015 年度は、谷口智雅会長（[taniguchi@human.mie-u.ac.jp](mailto:taniguchi@human.mie-u.ac.jp)）まで

\*\*\*\*\*

**東海支部会の HP がリニューアルしました！**

2016 年 4 月より支部会 HP がリニューアルしましたのでお知らせいたします。

新しい URL は下の通りです。

<http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/>

支部会の情報をいち早くお届けするとともに、陸の水ニュースレターや論文集のバックナンバーなどを掲載しています。また、HP に掲載する東海地方の陸水関連の写真も募集しています。一度、立ち寄って見て下さい！

（HP 担当 白金）

### 幹事退任のあいさつ

2014年よりHPを担当させて頂きましたが、新任のあいさつの言葉とは裏腹に、2年間ほぼ手つかずの状態となってしまう、会員のみなさまには大変ご迷惑をおかけし申し訳ありませんでした。この度、何とかHPのリニューアルに漕ぎ着けることができました。まだまだ、使い勝手の良いHPとはなっておりませんが、会員のみなさまの活発な情報交換の場になることを期待します。

どうもありがとうございました。

白金 晶子

会計に続いて会計監査としてお世話になりました。幹事の仕事を通して、支部会ならではの良さを知ることができました。皆さんも忙しい毎日をお送りと思いますが、研究発表会や談話会に参加しましょう。美味しいお酒をいただきながら、東海の川の話、池沼の話を楽しみましょう。情報交換、意見交換の中から、研究の閃きも生まれると思います。私も研究発表会で沢山のご助言をいただき、前向きになれたことも多くありました。感謝しております。今後とも、微力ではありますが、一会員として会の活動に協力させていただきたく思っています。

豊田市矢作川研究所 内田朝子

### 新幹事就任のあいさつ

この度、広報（HP管理）担当を拝命致しました吉成と申します。

皆様と協力しながら、活用しやすいHPを作成していければと思っています。初めての経験で何かと至らないこともあると思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

吉成 暁

会計幹事を担当致します大八木麻希です。かつて私が学生時代に初々しく発表した2003年の研究発表会は四日市大学で開催され、時を経て現在は四日市大学環境情報学部の教員としてその教室で講義をしています。仕事では地域の自然や地域貢献を意識する機会が増えており、改めてこの東海地域を中心として活動する支部会幹事として関わることを嬉しく思います。どうぞよろしくお願い致します。

大八木 麻希

### （編集後記）

みなさま、毎度お待たせしてみなさまにはご迷惑をおかけして申し訳ありません。陸の水ニュースレターNo.72をお届けします。研究発表会、総会も無事に終わり、今年度の事業がほぼ終了しました。役員も新体制になり、談話会、サマースクールの企画づくりがもうすぐ始まります。会員のみなさまからも魅力あるプランの提案をぜひお寄せください。3月上旬に山室真澄先生（日本陸水学会会長）を浜松にお招きしお話を聞くことができました。2016年度年会（11月那覇）にむけて、なにやら面白そうな企画をお考えのようです。乞うご期待だそうです。

（戸田 三津夫）